英米文学

MAINICHI LIBRARY

毎日ライブラリー

英米文学

杉木　喬　編

毎日新聞社刊

毎日ライブラリー　—英米文学—

昭和三十七年一月十五日　初版　定価三八〇円

編者　杉木喬

編者との申し合わせにより検印を省略します

発行者　高木金之助

印刷所　図書印刷株式会社

製本所　渡辺製本所

発行所　毎日新聞社
東京都千代田区有楽町一ノ一一
大阪市北区堂島上二ノ三六
門司市清滝町一ノ九〇二
名古屋市中村区堀内町四ノ一

© 1962, Takashi Sugiki　Printed in Japan

目次

イギリス文学

一　中世の文学……3
運命ということ
「時すぎぬ間に恋の薔薇を摘め」
二　イギリス・ルネサンスの文学……11
「ヒューマニズム」
エリザベス朝の文学
ジェイムズ朝の文学
三　十七世紀の文学……28
清教徒革命
王政回復

四　十八世紀の文学……34
良識の時代
ジョンソンの時代
五　十九世紀初期―ロマン派の文学……44
詩
小説
随筆
六　ヴィクトリア朝前期の文学……55
ヴィクトリア朝
評論
詩
小説
七　ヴィクトリア朝後期の文学……67
評論
詩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小　説
八　世紀末の文学……78
九　二十世紀のイギリス詩……80
革　命
ハーディ
エリオットとイエーツ
オーデン以後
一〇　二十世紀のイギリス小説……102
グレアム・グリーンを中心にして
外　地
子　供
前　衛
伝　統
一一　イギリス現代劇……128

近代劇の発生と展開
第一次大戦後の演劇
現代演劇の諸相

アメリカ文学

一　十七、八世紀の文学……145
アメリカ文学の流れ
植民と詩
宗教と実務
政治と詩と小説
二　十九世紀の文学……159
アメリカ・ロマン主義
文学的中心地による文学の種々相
ニュー・イングランドの文学

ホーソーンとメルヴィル
ホイットマン
鍍金時代
懐疑と迷い
リアリズムへ
リアリズム成年期に達す
三　二十世紀のアメリカ詩……187
新しい意識の形成
古い意識の崩壊
知的な詩人たち
今日の詩人たち
四　二十世紀のアメリカ小説……202
第一次世界大戦まで
一九二〇年代
一九三〇年代

第二次世界大戦以後
五　二十世紀のアメリカ戯曲・演劇……243
新しい演劇運動とその理念
オニールその他
喜劇の流れ
三〇年代の新興演劇
第二次世界大戦下の演劇
戦後の歩み
あとがき……258
索　引

イギリス文学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　中世の文学

運命ということ

西欧の文化史・文学史における一つの概念としてわれわれが「中世」という言葉を口にするとき、それが直ちにその次の時代のルネサンス（文芸復興）と微妙に対立し交錯しあった姿で念頭にうかび上がってくることはだれも否定することはできないだろう。中世と文芸復興という二つの時代が、ある特定の年代を境界として截然と区別できるものでないことはもちろんであるが、また他方では区別しないではおれない性格をそれぞれの時代がもっていることも事実である。問題はこの二つの時代の諸性格の連続性ということと非連続性ということをどの程度にわれわれが理解するかということであろう。両者の連続性をあまりに強調すれば、ルネサンスは影のうすいものにならざるをえない。イギリスの場合に限っていえば、「イギリス・ルネサンスは果して事実か、それとも虚構か」という問題が文学史家によって真剣に論じられているゆえんである。非連続を強調すれば、ルネサンスの光輝燦然たる様相との対比において、暗黒時代としての中世像がうか

び上がってくるか、ルネサンスの頽廃的な様相との対比において、神の恩寵に輝けるものとしての中世像がうかび上がってくるというわけである。たんに連続・非連続ということだけでなく、中世とルネサンスのそれぞれの性格をさまざまな文学史家が独自の信仰や世界観から規定してかかるという事態のため、問題はいっそう複雑なものとなってゆく。大勢は一時代前とはちがって連続をかなり重くみる見方が強いといえよう。両者の間には「鋭く激しい対立ではなく妥協があったのだ」というティリャード氏の言葉はいい意味で常識的である。

これは私の独断であるかもしれないが、文学の歴史は人間像の展開を基盤にしていると私は思う。「人間」というわれわれにとって根本的に重要な対象（あるいは現実）を各時代の人々がどうとらえているか、そのとらえ方の展開が文学史の中核に流れていると思う。文学史はもちろん直ちに思想史ではなく、韻文や散文や劇やその他さまざまな様式の歴史でもある。だがそのような美形式の歴史の根底に、それと有機的にからみあって人間像の展開があったことは否定できない。

中世前期、つまり五・六世紀から十一世紀ごろにいたる文学は多くの文学史家によって普通アングロ・サクソン文学とよばれている。当時のイギリス人すなわちアングロ・サクソン人の心情の中にかたく根ざしていた典型的な人間像は、歴史家タキトゥスがその著『ゲルマニア』の中で誌している、敬愛する主君のために喜んで生命をなげ出す忠誠なゲルマン人のそれであった。ゲルマン人の血をひくアングロ・サクソン人は悲劇的な逆境にたちながら雄々しく主君のために戦

い、運命の苛酷な試錬に抵抗する人間の姿に自分の美しく正しい姿の投影を見ていた。このことは、彼らの最大傑作である叙事詩『ベーオウルフ』の中にも現われている。これは北欧のある宮廷を襲う海の怪物を勇士ベーオウルフが倒す物語と、やがて国王になった彼が悪龍を退治したが自らも命を失う物語とからなっているが、これをたんなる妖怪談とみなしては本質的なものが見失われてしまおう。北欧の狂暴で陰うつな自然と風土を背景に、忠誠の心を重んじ、アングロ・サクソン人のいういわゆる運命に抗しつつ倒れてゆく悲劇的な人間像をわれわれはこの作品の中に感じとらなければならない。逆境にたつ人間の姿と心をさらに鋭く描いたものに『モールドンの戦い』がある。戦いに敗れ、主君の遺骸を前にして老臣は叫ぶ。「われわれの力減ずるに及び、われらの思いはさらに猛く、心さらに鋭く、勇気さらに百倍す。ここに血にまみれ横たわるはわれらの主君、泥土にまろびたるはわが勇しき主君。……われ歳老いたれど戦場を去るを望まず、ただ願わくは主君の屍の傍に死なんことを。」

いかにも原始的な感じが漂っているといえるかもしれない。しかしこのような絶望の勇気が今日の近代化され民主化されたイギリス人の心境の中にも流れていることは否定できない。このような人間の姿は深く沈潜し、さまざまな形となって機会あるごとに現われてきている。

『ベーオウルフ』の基調はキリスト教的信仰からいってたしかに異教的なものであった。しかし、この作品を作った心情の中にキリスト教の思潮が流れこんできたときに、面白い事態が生じた。

現世の主君に対する忠誠の心は主なる神に対する忠誠の心にたやすくすりかわることができた（このことは明治初年におけるいわゆる熊本バンドといわれる熊本藩士たちのキリスト教改宗と同じような径路を示している）。そして「運命」は「摂理」へと転化していった。アルフレッド大王がボエティウスの『哲学の慰め』を古代英語（アングロ・サクソン語）に訳した際、わざわざ原文にない「一切を支配するのは運命ではなくて神の意志だと思う」という一文を挿入したことはこのような精神状況を暗示している。キリスト教思潮が次第に強く浸透（しんとう）していくにつれ、キャドモンとかキニウルフといった詩僧ともいえる人々の聖書に素材を求めた宗教詩が書かれていった。そこでは、神は惜しみなく施す者として描かれている（『キリスト』）。酒宴の席上寵愛する臣下に惜しみなく自らの財宝を施す主君の姿が、恩寵の主と二重うつしになっているのである。「運命」と人間との対立・相剋は神とサタンとのそれに転換されている（『創世紀』）。

「時すぎぬ間に恋の薔薇を摘め」

中世後期、つまり十一世紀後半以後になるとイギリス文学の様相も複雑になってくる。一〇六六年のいわゆる「ノルマン人の征服」は注目すべき歴史的事件であった。ヨーロッパ大陸、とくにフランス文化の影響をうけて、言葉も雄勁ないわゆる古代英語（オールド・イングリッシュ）から典雅な中世英語（ミドル・イングリッシュ）と移

行し、イギリス特有の文化のあらゆる面、とくに文学の中核である人間像も変化していった。

このころになるとローマ・カトリック教会の教義の規定する人間観がほとんどあらゆる人々を強力に支配していた。男性的なゲルマン的な性格は、その潜在的な異教性とともにいわば後退していた。理性的な存在としての神と天使という極、非理性的な存在としての動物という極、それらの間にたつ中間的な存在としての人間、そういう図式的な階層（ハイエラーキ）が整然として人々の意識の中でつくりあげられていた。中間的な存在という意味がどのように解釈されるべきかが問題になるならば、その答は、「人間はまさに肉の淫欲のうちに、邪欲の燃えさかる炎のうちに、鼻をつく情欲の悪臭のうちに、罪の汚れのうちに、孕（はら）まれたのだ」という教皇インノケンティウス三世（『現世の蔑視について』）の言葉のうちに見出されよう。現世の蔑視は人間の蔑視につながる。われわれにとってもっとも人間的な行為である愛、たとえば恋人に対する愛、妻に対する愛も、蔑視の対象となる。「自分の妻を情熱をもって愛することはまさに姦淫罪にほかならぬ」という教会の倫理はそのことを歴然と示している。

このような教義に規定された人間像に対する抵抗が十一世紀後半からヨーロッパ大陸において「宮廷愛」の名の下にはじまってゆく。愛する女性をあたかも聖母マリアを愛するかのような擬態を示しつつ崇拝し愛するという複雑な感情の構造が現われてくるのである。宮廷愛の原型が南仏プロヴァンスに始まり、そこでは王妃と臣下の騎士の間の愛という形をとったが、必然的にそ

こには姦淫という事態が生じる可能性がでてくる。アーサー王伝説を中心とするさまざまなロマンスがそこから次第に生じてきた。そしてそれらがイギリス文学の中に流れこんでくる。アーサー王伝説の中で重要な位置を占めるものが王妃ギニヴィアと円卓の騎士ランスロットとの不義の恋愛であることは周知のとおりである。

もちろん、カトリック教会の信仰に根ざす作品も一方において依然として書かれていた。ヒルトンとかノリッジのジューリアンといった修道院に関係した詩人たち(後者は女性である)の神秘詩がそうであるが、特に重要なのはラングランドである。彼も修道院にぞくしていたといわれるが、『農夫ピアズの幻』の作者という以外(これにも異説がある)その生涯は伝わってはいない。一三六二年、一三七六—七年、一三九三—九年ごろにそれぞれ書かれたと推定される稿本が残っているが、夢物語という形式をとったこの作品は要するに作者の理想的な人間像の探究にほかならない。「良き生活」、「より良き生活」、「いと良き生活」という三つの人間生活の類型の価値を作者はたどっている。ここではカトリシズムの詩とうたわれるにふさわしい信仰の立場が守られている。

だが、他方では人々はようやく薔薇(ばら)の艶(あで)やかな美しさに心をひかれていった。薔薇は信仰の場では神秘的な薔薇として聖母マリアの象徴であったが、世俗の人間的な場では恋愛の象徴であった。フランスの『薔薇物語』がイギリス人の心情の中に大きな意味をもちはじめる。イギリス中

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com